

小論文

(80分)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は7ページあります。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁または解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手をあげて監督者に知らせてください。
4. 解答はすべて、別紙解答用紙の指定された箇所に記入してください。
5. 受験番号、氏名、フリガナを解答用紙の受験番号・氏名欄に必ず記入してください。
6. この問題冊子は試験終了後に持ち帰ってください。

令和6年度 宮崎公立大学 一般選抜(後期日程)小論文課題

問題

問題文は、石田光規『「友だち」から自由になる』(光文社新書 2022 年)の第2章「友だちに本音を言えない」、第5章「『形から入る友人』関係を超えて」から一部抜粋したものです(ただし、文章全体の内容が伝わりやすいように、一部表現を修正した箇所があります)。この文章は、現代社会における「友だち」関係の特徴について説明し、今後の「友だち」関係のあり方について筆者の考えを示したものです。

以下の二つの課題について 800 字程度で論述してください。二つの課題それぞれの字数配分は自由です。

課題1

問題文の内容をふまえると、あなたの「友だち」関係はどんな関係として整理できますか?その理由も含めて述べてください。問題文の内容をふまえても整理できない関係の場合でも、その理由を含めて記述すれば採点には影響しません。

課題2

筆者は「知り合い」で統一する関係によって、「友だち」から自由になる方法を提案しています。あなたは今後、「友だち」との関係をもどのように考えますか?「筆者と同じ方法で『友だち』から自由になる」、「筆者とは異なる方法で『友だち』から自由になる」、「『友だち』から自由になる必要がない」、「その他」のいずれかの立場から、理由も含めて述べてください。どの立場であっても、採点には影響しません。

「形から入る友人」への転換

現代社会の友人関係は、「かつて」の友人と同様に「善きもの」と考えられていた。他方、友人関係のあり方は、「かつて」とかなり異なっていた。

ギリシア哲学の友情論に典型的に見られた「かつて」の友人は、人とのつながり方の理想を体現したものであった。理想としての友人関係は、相手とのつきあいを積み重ねていった結果、ようやく得られるものであり、それは「結果としての友人」と言いうるものであった。

社会の個人化が進むと、放っておいてもつながりに取り込まれる時代は過去のものとなる。誰かと持続的なつきあいを望むのであれば、人びとは、つながりのなかに継続に足る要素を詰め込まなければならなくなった。

つながりが不安定化するなか重宝されたのが「友人」または「友だち」という関係性である。人びとは出会った相手に「友だち」というラベルを貼り付け、「友だち」らしい行為を繰り返すことで関係の維持を図った。

「友だち」というラベルにしたがうように形成されてゆく関係は、「形から入る友人」とでも言うものである。「形から入る友人」のつながりのあり方について、さらに掘り下げて検討してゆく。

対立の回避と場の空気

「結果としての友人」と「形から入る友人」の根本的な違いは、つながりの築き方だ。前者は、「友人ではないつながり」と、対話やいさかいなどのコミュニケーションを重ね、徐々に友人になってゆく。一方、後者は、相手をあらかじめ友人と確定して、そのつながりに友人的なコミュニケーションを詰め込んでゆく。

つながりの築き方の違いは、両者の関係に、人との対立にまつわる重要な変化をもたらす。前者は対立を盛り込んでつながりを築いてゆけるのに対し、後者はなるべく対立を回避するよう行為者に仕向けさせる。この点について、もう少し詳しく説明しよう。

人間関係が流動化した社会では、人びとは、誰かとつながり続ける要素を自足しなければならない。たがいにつながりからの退路が確保された状況において、人びとは、お気に入りのつながりを持続させようと、関係に大量の正の感情を注ぎ込むようになった。

誰かとつながり続けるためには、相手と親しくなり、そのつながりに愛着を抱くようケアしなければならない。正の感情で満たされたつながりは、裏返すと、負の感情を覆い隠したつながりとも言える。「形から入る友人」関係は、極力対立を回避することで成り立っているのである。

純粋な関係性について論じたギデنزも、純粋な関係性は「パートナーどうしのあいだに都合の悪いことが起これば、それは本質的に関係性それ自体を脅かす」と指摘している。いつ関係が解消されるかわからない状況下で、私たちは、誰かと友人関係を維持するために、マイナスの事態を極力回避するよう、場の空気を読まねばならなくなった

のである。

友人関係の悪循環

私たちの友人関係は、「悪循環」とでも言えるような状況に陥っている。人とつながることを社会から強く要請される時代は過ぎ去り、誰かとつながりたい人は、つながりを自足しなければならなくなった。

つながりの自足を強いられるなか、多くの人は友だちと接することを望んでいる。若者への調査でも八割以上の方が「友達と連絡を取っていないと不安」と感じていた。「一人がよい」と強く願う人はあまりいないのである。

しかし、誰かとのつながりを継続する材料が乏しいなかで、相手とつながり続けるのは容易ではない。人びとは目の前の関係を失わないよう、あらかじめつながりに「友だち」というラベルを貼り付け、それに見合ったプラスの内容を埋め込んでゆく。

つながりにプラスの内容を埋め込むことで成り立つ友人関係では、おたがい場の空気を乱さないよう気を遣い、本音をなかなかさらけ出そうとしない。本音を言うことは関係を危機にさらすリスク要因なのである。その一方で、人びとは友だちだからこそ嘘はつきたくないという想いも抱えている。

今を生きる人びとは友だちというつながりを維持するために、非常に高度なコミュニケーション技術を駆使している。結果として、人びとは友だちの前にいるときほど疲れ、一人になると落ち着くという逆説的な状況に陥ってゆく。

とはいえ、ずっと一人でいるのは寂しいので、人びとは時間が経つと友だちとのつながりを求めるようになる。かくして(友だちと接することを望む)^{※1}状況に戻ってゆき、友人関係の悪循環が完成するのである。

「形から入る友人」と友情

「形から入る友人」関係は、「真の友情」には発展し得ないのか否かについて検討してみよう。これについては「発展しうる」と結論づけられる。

友人関係が形から入るものになったからといって、友だちという形を保つよう気を遣い合っているばかりではない。また、コスパを意識して、つきあう相手を値踏みしている人ばかりでもない。

学生に現代社会の友人関係の話をする、賛同の声があがる一方で、「そんなことはない。私には本音で話せる友だちもいる」という反論も耳にする。また、今どきの若者であっても、親友は三、四人はいる。こうした事実から、今どきの若者に孤立傾向が見られるといっても、相手と向き合い友情を育む人もいえるだろう。

(中略)

古代ギリシア以来の友情論で確認したように、「かつて」であっても「真の友情」に彩られた関係は貴重なものであり、奇蹟の産物ととらえられていた。

この点を考慮すると、「いま」の社会が「むかし」の社会に比べ、友情を仲立ちとした友人関係が少ないとは、そう簡単には結論づけられない。

昔も友人関係はもろかった

以上の議論をふまえたうえで、次に、「かつて」の友人関係は永続的でもろくなかったのか、ということについても確認しよう。

結論を先取りすれば、「かつて」の友人関係であっても、相応にもろさを抱えていたと言える。奇蹟の産物ととらえられるほど、手に入れることの難しい友人関係を築けたとしても、破綻^{はたん}してしまうことはあったのである。

(中略)

近世ヨーロッパの書簡を研究した高橋安光も、当時の友情について、書簡で「ちょっと批判しただけで、そのまま絶交というケース」もあったと述べている。率直に物言いをできる時代には、物言いが率直だからこそもたらされる関係の破綻もあったのである。

現代の友人関係もそこまで嘆くものではない

結局のところ、「かつて」であっても「いま」であっても、友情で結ばれたつながりができる機会はまれであっても存在するし、友人関係がもろさを抱えていることも共通していた。

それならば、友人関係の有無や関係の破綻にそこまでおびえることもないだろう。かりに関係が破綻にいたったとしても、ニーチェのように「互いにいっそう敬意を払うにたる存在」になればよいのだ。

重要なポイントは、関係の流動化とともに、友人・友だち概念^{※2}が蔓延し、私たちが必要以上に「友人・友だち」をつくるよう意識させられてしまったこと、その一方で、「かつて」の人びとのように、安定的な関係を下地に、友情を育むほどの時間に恵まれていないことにある。

以上の議論をふまえて私が提案したいのは、いったん、友人・友だち・友情といった概念から距離をおくことである。

「友だち」を意識しない

自らが動かなければ、つながりから漏れる可能性のある時代を生きる私たちは、つながりを確保しようと肩に力を入れがちだ。つながりを確保するために、なんとか友だちをつくろうと焦る気持ちはわからなくもない。しかし、友だちを得ようと欲するほど、かえって苦しくなることもある。

友だちを得ようと意識すれば、私たちは目の前にあるつながりを逃すまいと肩に力を入れてしまう。その結果、相手の気持ちにとらわれ、つながりのなかにマイナスの材料を持ち込まないよう気を遣ってしまう。

誰かと友だちであろうと意識するあまり、相手に率直にものを言えなくなったり、逆に、おたがいをぶつけ合えるつながりがないことに目がいたり、ということは多くの人が経験する。

私自身はつながりのある相手を友だちかどうかという基準で区分しない。誰かに対して「友人」「友だち」という言葉を使うこともない。家族・親族は別だが、それ以外は「知り合い」で統一している。理由は以下のとおりだ。

友人や友だちは、「よきもの」というイメージが強く根付きすぎている。かりに、ある人を「友だち」と呼ぶようになったとしよう。誰かに「友だち」というラベルを割り振るようになると、私は相手に対して、つながりにかんするある一定の水準を満たした人と判断しているような気分になる。

このような考えにとられるのが非常にわずら煩わしいため、私は、出会った人はみな、「知り合い」と呼ぶようにしている。そうすると、出会った相手を判定するという感覚から距離をおけるので、コスパ意識を緩和することもできる。

では、私に「友だち」がないのかというと、おそらくそんなことはないだろう。相手が私のことを「友だち」と認識してくれていることはあるだろうし、定期的に飲食をともにする「知り合い」もいる。ただ、関係性に貼り付けられたラベルに振り回されて、悩むことは疲れるので、そうしていないだけだ。

「友だち」というメッセージ性の強い概念から距離をおくことで、人と自由につきあえるようになることもある。私から見れば、「友人」「友だち」というラベルは重すぎるのである。

社会は「友だち」を意識させようとする

その一方で、社会の側から「友だち」を意識させようと圧力がかかる機会が多い。卒業式や入学式では、「友だちができること」「ずっと友だちでいること」を礼賛する歌が歌われている。

哲学者は友人を理想の関係性に見なし、そのようなつながりをつくることを人生の幸せととらえていた。

日常生活でも友人・友だちに触れる機会が多い。私たちは子どもと話をするさいに、「学校の友だちと仲良くしなさい」という言葉を頻繁に使う。教員もそうだろう。「友だちなんだからクラスの人とは仲良くしなさい」としばしば言う。若者の間では、友だちのいない人を「ぼっち」と呼び、見下した視線を注ぐ。

こうした行為には、出会った人、居合わせた人とは「友だち」になり仲良くするのがよいというメッセージや、「友だち」のいない人はさびしい人だというメッセージが込められている。

とはいえ、出会った人、居合わせた人すべてと「友だち」になるというのは無理な想定だ。人は頑張っても「友だち 100 人」などそうそうできないし、「ずっと友だち」で

いられることもなかなかない。そうであるならば、「友だち」になることを求めてくる圧力とやや距離をとり、フラットな視点でいるほうがよいだろう。

まず緩やかなつながりから

その一方で、世のなかに目を向けると、つながりをつくる機会はたくさんある。趣味のサークルを探そうと思えばいくらでもあるし、趣味はお金がかかるというのであれば、ボランティア活動でもよい。多くのボランティア団体はメンバー不足に悩んでいるのが実情だ。

インターネットを介したつながりも、そこに頼りすぎなければよいだろう。私自身も、今所属している地域のボランティア団体のことを、ネットをつうじて知った。

日常生活を送るさいに、どこかに立ち寄る習慣をつくっておくのも効果的だ。お酒やコーヒーが好きならば、居酒屋やスナック、カフェの常連になるという手もある。

そのさい、重要なのは、交流やつながりづくりを目的とした集まりは、なるべく避ける、ということだ。交流やつながりづくりを重視した場では、「友だち」感覚が醸成され、肩に力が入りやすくなる。

ゆえに、何らかの活動をベースに定期的に参加できるものがよい。交流以外の目的で定期的に参加してゆくなかで、仲良くなってゆく、あるいは、仲のよい人ができたらもうけもの、くらいがちょうどよいのである。まず、「友だちになる」「友だちをつくる」という考えを脇におき、人のなかに入っていきことこそが肝要である。

心のもちようを軽くする

友だちが100人できなくても、誰かとずっと友だちでなくてもよい。あらかじめ友だち・友人をつくろうと肩肘を張らなくてもよいだろう。先ほど振り返ったように、日本社会には、つながりをつくるきっかけがあふれている。

むしろ重要なのは、短期的なコスパにとらわれず、長期的な視点をもってコスパを考えてゆくことだ。そのような視点でいろいろな人と出会って、長い時間が経過して、友だちと呼べる人が数人でもできればそれでよいだろう。

実際のところ、長い時間一緒にいるうちに関係の質が変わり、気持ちがつうじ合うようになることもある。

(中略)

友人・友だちというつながりは「むかし」も「いま」もできにくく、失われやすい。だからこそ、友だちがいないからといって過剰に卑屈になる必要はない。友だちがいることのほうが奇蹟的なものだから。ごちゃごちゃ考えるよりも、まず、誰かと一緒にいてみることだ。

そのような心持ちでいたほうが、気持ちよく人づきあいができるだろうし、「真の友情」に到達できる可能性も高いはずである。

※1：() は作題者加筆。

※2：概念は「ある事象の共通する性質を取り出して表象されたもの」という意味だが、ここでは「友だちについての考えや意識」の意味の方が文意を取りやすい。